

▲▲▲ リアリティの高い内容 ▼▼▼

去る七月二十八日の「ソ連海軍の日」に、ゴルバチョフ・ソ連共産党書記長がおこなったアジア・太平洋地域の平和と安全保障にかんする演説は、断期的な重要性をもつものであった。ウラジオストックという極東ソ連の太平洋沿岸都市で中国や日本などアジア諸国を目前のまえにこなされたこの演説もその点ながら、まず第一に、その内容がきわめて包括的かつ具体的で、従来のソ連官報の政治宣伝的なこの種のスピーチとは、まったく性質の異なった



ものであった。

第三に、今回のゴルバチョフ演説は、七〇年代末以来の「新冷戦の時代」の一方の当事者であり、その責任を負っていたソ連が、みずからの思まわしい過去を清算しようとして、この演説を明白に物語っているところである。

そして第三には、アフガニスタンからの六個連隊の撤退、モンゴル駐留ソ連軍の相当部分の撤収、中国との地上兵力相互削減交渉の用意など、軍事戦略上もきわめて重要な措置について、ソ連が近い将来の自

己の行動計画を公開の場で一方的に約束したところである。このようなことは、従来のソ連外交には見られないことであった。この点にも、現実主義的なゴルバチョフ新外交の並々ならぬ意欲が感じられるといえよう

ゴルバチョフ演説、どう読む

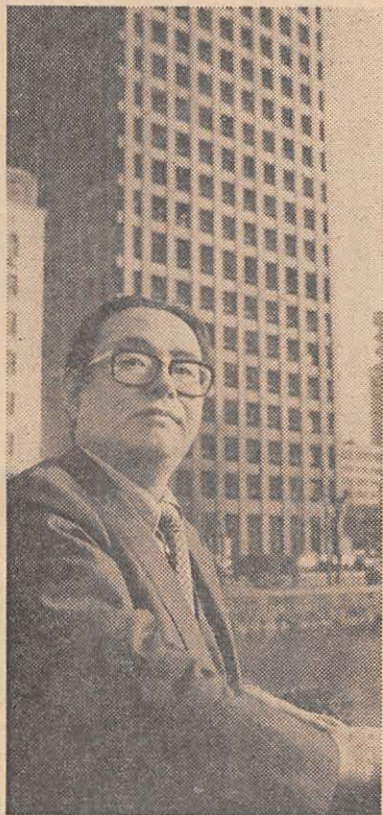
対ソ外交戦略とシナリオを

パチョフ書記長自身の世界認識を全面的に示したという点でも意味深いものであったし、アジア各地域の状況について、きわめて具体的に言及されていることが、この演説のリアリティを著しく高めていた。

▲▲▲ 除去される中ソ間の障害 ▼▼▼

一つは印象を私を得たのであるが、今回の演説は、アジア・太平洋地域のほぼ全域にわたっているもの（ソ連領土内）の中ソ関係とソソ関係にほって、問題点を

東大教授 中嶋 嶺雄



の擧げて みたい。

まず中ソ関係についてであるが、私から強調してきたように、中ソ関係は、いまきわめて順調に推移していることを改めて確認しなければならない。今回も「新疆ウイグル自治区とカザフ共和国を結ぶ鉄道の建設協力問題に前向きな回答を与える用意がある」とゴルバチョフ書記長は語っているが、モスクワ・北京間を最短路で

が、それ以上にゴルバチョフ書記長は、ブレジネフ旧外交のマイナス遺産から脱き放たれようと必死になっていると観望してもできそう。いずれにせよ、今回の演説は、一種の新しいグローバリズムに基づくソ

した状況下において、中国のいわゆる中ソ関係改善のための「三大障害」は、実際には、西側諸国を奇立たせないための鄧小平主任らの側面首脳へのプレゼントでしかなかったのであるが、今回の演説に沿って、中ソ関係の障害は名実ともに除去されることになりそう。ペトナム情勢にかんしても、チュオン・チン新体制下で中越関係改善が日程にのぼりつつあることを忘れてはなるまい。

▲▲▲ 日中条約の覇権条項削除も ▼▼▼
さて日ソ関係であるが、ゴルバチョフ演説では、「過去の問題にわずらわされない平静な雰囲気での深い協力を必要としている」となっていて、従来方次第でのようにも解釈できるものになっている。それにして、ソ連は今日、日本の経済力にきわめて高い評価を与えているのであり、それは「日本人は経済外交という経済活性化の方法をもっているが、それはソ日協力に役立つであろう」との表現に端的にあらわれている。

ア社会主義圏の再編成がすすみ、相互依存と相互補完の関係が強まるであろうが、それは、今日の社会主義圏が、ソ連も中国も、その内政、とくに経済の脆弱性に直面しつつあるだけに、当然の成り行きといえよう。とくにソ連は、ブレジネフ時代の世界戦略の軍事的拡大のコストに悩んでおり、今回の演説案の背景にも、そのことが見えている。

いまや社会主義諸国は、かつてのように威勢よく「内輪もめ」をしている余裕もなくなっているのだから、この点を冷静に受け止めて、中ソ和解が日本にとって安全保障上の脅威になることは必ずしもいえないであろう。